

質問事項

議長より質問の御許可をいただきましたので、壇上より質問させていただきます。

最初に、奥越地区養護学校の設置問題について伺いたします。

先般、新聞紙上でも取り上げられたとおり、同校の設置問題は、まず、福井県の基本構想策定からはや6年が経過していることが問題です。

この建設計画に対する答申の中では、当初より、交通アクセスと県立学校設置状況のバランスを求めています。奥越地域から福井地区の嶺北養護学校等へ通学する生徒を持つ保護者の方々にとり、どのような問題よりも、いち早い設置が希望であるはずで

す。新養護学校には、さきの福井県基本構想から、設置場所にはそこで学ぶ子供たちの教育環境にふさわしい条件を満たすことが要求されます。

いくつかの条件が考えられます。1つは、総合病院が近くにあることです。勝山市には、奥越唯一の総合病院である福井社会保険病院があり、また、福井大学医学部 附属病院等にも交通アクセスは良好です。また、周囲に豊かな自然環境を配しながらも、交通アクセスが、どの地区からもよいことが望まれます。

当市は、穏やかな丘陵地帯と、九頭竜川及び支流の水辺等にも恵まれ、風光明媚とは言いませんが、豊かな自然があります。さらには、安全性が高い地域であることはもちろん、緊急時には、速やかな避難が可能であり、かつ、支援が容易であることも求められます。そして、その学校の特性上専用の施設が必須であると考えます。

以上を考慮し、早急な施設の新築こそが、子供たちの学習環境を満たすことは言うに及ばず、その保護者の方々の要望に応えることになると思います。

現在、奥越地域からは多くの子供たちが嶺北養護学校に通学しています。では、その現状はどうなっているのでしょうか。先般、市長もその答弁の中で、環境の悪化を述べておられました。先日、同校に通学する子供を持つ保護者の方と話をする機会がありました。同校は、本年もプレハブ校舎を建てて増床しましたが、教室不足解消のめどは立たず、ゆとりのない教育環境が続いているとのことでした。一刻も早く、このような状況は解決すべきです。設置条件、保護者の要望、希望、地域の要望、いろいろなことがあります。しかし、今最も求められていることは、早急な養護学校の設置に尽きるのではないのでしょうか。すべてに対して早急な設置が優先されるべきです。

もはや猶予できる状況ではなく、あすにでも決定し、着工が進められるべきです。現在では、生徒、生徒の保護者の方々だけでなく、多くの市民の方々が、その設置を心待ちにしています。勝山市の同校設置に対する考え方を伺います。

次に、中学校等の部活動について伺いたします。

3月の議会におきまして、当市の中学校においてクラブ数の減少が進んでいるため、その対応策として合同部を設置できないかとお伺いたしました。残念ながら、多くの問題があるため、今後、研究を重ねたいとの御回答でした。

それでは、全国的にはどうでしょうか。すべてにおいて右にならうことがよいわけではありませんが、現在の状況として考えるべきだと思います。

文部科学省の公開する「中央教育審議会スポーツ・青少年分科会 スポーツ振興に関する特

別委員会議事要旨とその配付資料」において、複数校合同運動部活動状況(公立学校)の報告数値として、平成17年度において、全国で855校の中学校で合同運動部が実施されていると報告されています。さらに、平成19年度文部科学省白書の中において、学校体育の充実として、運動部活動への支援の項目が設けられ、教育に関連する項目としてその重要性が明記されています。また、その中で同省は、設備の整備についても平成19年度の予算額を示し積極的な支援を明らかにしています。

事実、様々な市において合同部活動が既に実施されており、その実践例も報告されています。さらには、拠点校方式という市内の他の中学校への既存部活動への参加方式も既に実施されています。実践例として、兵庫県のある市においては市立中学校部活動等の活性化指針を設け合同運動部に対して明確な姿勢を打ち出しています。文部科学省は平成19年度において、合同部活動の実践のために予算措置も講じています。

さきには、多くの問題があり実施は難しい旨の御回答をいただいています。他の市町村にできることが、勝山市ではできないはずはありません。勝山市において解決できない特別な問題があるのでしょうか。場所、人員、時間、移動手段、何らかの解決策はあるはずです。

どの分野でというわけではありませんが、中学校の部活動は実質2年半です。問題が発生してからではおそいはずですが、常に対応しておくべきだと考えますが、いかがでしょうか。

一方、グラウンドの芝生化等の整備充実も、白書の中では推進がうたわれています。当市においては、部活動環境の未整備が、他の市町村に比べ、目立つように思います。施設、設備、備品、すべてに不足しがちなのではないのでしょうか。市営体育館、総合運動公園等の大型施設は御存知のとおりですが、そのほか、様々な施設が不足しがちであるように思えます。大型施設には、様々な問題が付きまとうことや、多大な投資が財政上、厳しいことは十分理解できます。かといって、手をこまねいては未来がありません。できることは行うべきです。基金の設立も1つの手段ですし有利な国庫や県の補助金制度の活用も考えられます。

大型施設はさておきまして、既存施設の充実が不足しているのではないかと思います。施設の内容、状態、備品の状況について、今一度、検討すべきではないでしょうか。例えば、さきの議会でも伺いましたが、グラウンドの一部全天候化はどうでしょうか。市としての経験がないため、研究すると御回答でしたが、いかがでしたでしょうか。旧丸岡町民グラウンドにおいては、バックストレート部が全天候化されています。県営健康の森においては実例化されています。敦賀高校においては、グラウンドの一部がゴムトラックとなっています。技術的な問題なのか、予算的な問題なのか、研究の結果の御回答を願います。

次に、当市においては来年5月に、勝山市旧機業場の完成を見ることとなります。先日は浄土寺川ダムも新たに完成しました。本年度中には中部縦貫自動車道も一部開通を見ることになり、いよいよ観光勝山の体裁が整います。既に、スキージャム勝山、県立恐竜博物館、越前大仏、平泉寺をはじめとし、観光地としての要素には不自由しないところとなりました。まちの駅制度も大きく育ちつつあります。ここに新たに勝山市旧機業場が、勝山市の繊維の歴史の資料館として、また、市内観光の拠点としてオープンすることとなります。完成までの経緯はともかくとして、できたからには活用されなければなりません。様々な形で、それぞれの施設で運営方法が検討されていると思います。

では、これらの観光施設、スポット、イベントの連携は、どうなっていくのでしょうか。確かに、ハー

ドウェアとして施設は完成しました。場所の提供という点では、また、まちの駅もハードであると考えます。ソフト的には、イベント、チラシ等、そして、各施設は何らかの連携を図ることによって観光客を案内することになるのでしょうか。

現在までのソフト面での市内観光の案内は、どのような状況にあるのでしょうか。通常、観光地の情報を得る手段は、出発前にはガイドブック、ウェブ上の情報等が主体となります。出発後の現地近くでは、観光案内所、もしくはサービスエリア、パーキングエリア、道の駅等のドライブイン等における案内、または、パンフレット等になります。

さて、勝山市においてはどうでしょうか。勝山市旧機業場を拠点とするからそこで。観光案内所で案内する。まちの駅でも案内している。様々な意見と手段が考えられています。しかし、観光協会がどこにあるのかを市民の方に聞いてみてください。現状は、あくまで場所に頼っています。そして、それは他の施設、イベントに寄生する手段です。言い換えれば、すべて、点、もしくは線でありエリアではないのです。旧機業場に行けば、次の目的地が見つかる。長尾山、スキージャム、平泉寺でも、すべて同じです。さらには、すべて能動的行動があって初めて返事が返される点も同じです。現状では、勝山市はソフト的な観光案内が不足していると思います。

これまで、施設のオープンまでは積極的に支援してきたが、その施設のみへの支援策にとらわれすぎていなかったでしょうか。1つの施設の利用を図る、そのためのみのイベント、案内施設にとらわれすぎているのではないかと考えます。すべての施設発展のために、全く別の新たな手段を投入してもよいのではないのでしょうか。

そこで、そのような手段の1つとして、コミュニティFM局を開設し、活用を図ることを検討してはいかがでしょうか。既に県内では3局、全国では200局以上が開局しています。運営形態は、第三セクター、民間、NPO等、いろいろな形態があり、規模も資本金も様々です。中には、市からの補助金ではなく、広報等の放送を委託し放送料を支払っているところもあるようです。経営的に厳しく、撤退する局もあるようですが、場所、手段を考えれば勝山市においては有効に運営できるはずです。

例えば、地場産センターでオープンスタジオを設ける。勝山市旧機業場、長尾山にサテライトを設ける。スキージャムのスタジオと連携する。エリアとして観光案内ができます。また、既存施設の活用や活性化も可能です。観光地の連携も、移動中継車を用いれば可能です。地域イントラ設備を用いて転送し、遠隔地に中継所を設けることもできるかもしれません。

財団法人北海道科学技術総合振興センターの主催した調査の中に、北海道においてではありませんが、コミュニティFMの地域での可能性に言及した調査が報告書にあります。この報告書の中で、当時、北海道において開局していた放送局、18局の開局の経緯と、現状、今後の課題が示されています。開局の経緯は興味深いものがあります。しかしながら、不安とともに、可能性を感じずにはいられません。中には、1人の力から始まった局もあるようです。

これだけの施設と資源を持つ勝山市において、きっと有効な情報伝達の手段となるはずです。また、その特性から当然防災対策への応用も可能です。検討してみる価値は十分にあると思われるかもしれませんがいかがでしょうか。

防災対策といえば、現在、勝山市では緊急メール配信システムの整備が進んでいます。こちらは、放送と違い、自動的に受信してくれる、つまり常に聞いていなくても情報を得られる特性を持っています。その意味では、情報を要求する人には確実な手段です。こちらも、さらに有効に活用する方法が考えられると思います。

勝山市のシステムを、単に緊急時の同報メール配信システムのみとするか、または、これらの様々な価値を付加するシステムにするのか考えられないでしょうか。現在の状況をお伺いいたします。

続きまして、がん検診の補助制度について伺います。

本年度より後期高齢者医療制度移行後も、勝山市においては、がん検診の負担金は従来どおり維持されました。大変喜ばしいことです。

一方、従来は、70歳以上の方はがん検診の自己負担金が免除されていました。ところが、本年4月よりの同制度の施行により、70歳以上75歳未満の方は、制度上から、自己負担金が発生する状況となっています。また、従来のほかの条件により免除されている方を除くと、その人数は限定されると思われます。財政的な負担は発生しますが、従来からの体制を維持することはできないでしょうか。

社会保障制度は、現在、2本建て、3本建ての2段積み、3段積みとなり、もはや素人には理解不可能ではないかとさえ思われます。年金制度、健康保険制度等が複雑に絡み合っています。自己負担額が、結局、ふえるのか減るのかさえ納入通知を見ても、まだわからない状況です。

このような中で、補助金の削減は非常に厳しいものがあると言わざるを得ません。市として、何らかの救済策を講じて、従来と同様にこの年齢層の負担額を免除することができないかどうかを伺います。

最後に、当年11月に県立恐竜博物館で開催されます、WROジャパンのエキシビション福井大会について伺います。

同大会の第1関門であるチャレンジキャンプは、昨日、6月15日に福井工業大学にて行われました。6月12日には、ホームページも開設されました。また、8月2日から3日にかけては、福井地区の予選大会が福井工業大学にて行われると伺っています。要綱によりますと、出場チームは全30チーム、うち県内チームは22チーム程度となっています。残念ながら、現在のところ、市民の方々は大会が開催されることは知っているが内容について理解している人々は少ないのではないのでしょうか。中には、高専ロボコン、大学のロボコンと勘違いされている方も多く見受けられます。

WROは、そのホームページの案内によると、本戦は自立型ロボットによるコンテストとされ、世界中の子供たちが、それぞれロボットを製作し、プログラムにより自動制御する技術を競うものです。市販ロボットキットを利用することで参加しやすく、科学技術を身近に体験できる場を提供するとともに、国際交流も行われる大会となっています。当大会は、WROの本戦ではありませんが、レゴ・マインドストームを利用して製作し、プログラムの基礎知識を学ぶものです。当日は、本戦出場者も来場予定です。

とすると、この大会の開催は、主催者でこそありませんが、勝山市を、日本のみならず世界レベルにて広く知らせるチャンスではないでしょうか。昨年度、当市では、IT団体による自立型ロボットのコンテスト、福井県歯科医師会主催による歯磨きロボコン両大会が実施され、本年度も継続されると聞いています。徐々にではありますがIT勝山の姿も見えてきたのではないのでしょうか。

現在までのWROジャパンの状況と今後のスケジュール及び勝山市としてのかかわり方、方針を伺いまして壇上よりの質問を終わります。

回答

山岸正裕市長

奥越養護学校についてお答えいたします。

奥越養護学校につきましては、この3月定例会でもお答えをいたしておりますが、勝山市としては、ぜひとも地元で誘致したいという気持ちを強く持っております。県の機関や県立施設の大野市への偏りが強くなる中、県施設の適正な配置の観点からも、一層力を入れて、ことしに入ってから、知事及び県教育長に強く要請をいたしております。

御質問にもありましたが、嶺北養護学校では、児童・生徒数の増加によって、学校に通うすべての人にとって、大変悪い教育環境となっていることは、私も実際に目の当たりにしております。そういう意味では、平等な公教育を受ける観点からも、早い対応が必要であるということ、また、とりわけ当市も含め、奥越地域から通う児童等とその保護者にとっては、遠距離通学であることから、精神的にも経済的な面からも大きな負担となり、これらからも、保護者からの開設の要望は強く、勝山市での早期の解決が必要と考えております。

これまで、平成15年度より、いち早く県に対する最重点要望事項として、毎年、開設の希望とその時期を示してほしいということ、さらには、開設までの支援措置として、スクールバスの運行と通学費の補助の2点を、県知事及び県教育長に対し、直接要望してまいりました。しかし、これに対する知事並びに県教育長の回答は、これまで、遺憾ながら具体的なものは示されてきておらず、誠にもどかしい思いをしております。

しかしながら、この4月に開催された県下教育長会議での県教育長のあいさつの中で、ようやく、養護学校問題は早い時期に決着をしていきたいとの考えも示されましたので、近いうちに方向性が出され進展するものと考えております。

山 範男教育長

次に、中学校等の部活動のあり方についてお答えします。

1点目の、市内複数中学校による合同の部活動ができないかということについてでございますが、まず、中学校の部活動の状況を御説明しますと、現在、市内各中学校においては、学校が、主体的、積極的に部活動の指導を行っていますが、生徒減少と、それに伴います教員の減少により、部の統廃合が進んでいます。年々多忙化する学校現場におきまして、部活動の意味を理解し、生徒に自主的、主体的に活動できる場を提供するため、各中学校では、教職員の多くが、休日も返上して取り組んでおります。

そこで、御質問の複数校合同部活動についてであります。勝山市と同規模の中学校を抱える複数の地区の状況について、聞き取り調査を行いました。両者とも現在のところ、複数校合同部活動を推進する動きはないようです。

これらの聞き取り調査から、2つの問題点が改めてわかりました。1点は、安全に生徒を送迎する必要があること。市が、その条件整備を行うことは、現時点では困難であると考えています。そして、もう1つは、何より重要なのは、実践、実施する場合には、それぞれの学校が、強い意思により問題解決のための学校間協議を行う必要があるということでもあります。

生徒や教員が減少し、部活動の統廃合が進む現段階では、市としては、学校を中心にして複数校合同部活動を積極的に推進することは困難であると考えています。

昨年、中学校2年生に行った学校生活に関する意識調査でも、「部活動に積極的に参加してい

ますか」という項目に対して、「そう思う」が 59.6%、「ややそう思う」が26.8%で、両方あわせると9割近い生徒が、積極的に部活動に参加している様子がうかがわれます。各学校では、議員同様、すべての生徒に恵まれた環境で伸び伸びと活動させてやりたいという思いで、日々、努力を続けています。

市としましても、その意思を尊重しながら、できる限り支援を行ってまいりたいと存じています。児童・生徒の減少により、選択肢の狭まる中で、何らかの解決策を見いだせないかを、今後、検討してまいります。

こうした中で、現在、中学校に部活動のない陸上競技におきまして、競技経験のある市内の若者が、第2、第4土曜日に陸上練習会を開き、市内の小・中学生の指導を行っています。来年は、週1回に回数をふやし、陸上に興味のある児童・生徒の指導に当たりたいとのことです。このような市内の動きを見守りながら、今後、この問題について考えてまいります。

次に、学校グラウンドの芝生化と一部全天候化についてお答えします。

まず、芝生化についてですが、市内では、私も勤務しました県立勝山高等学校が、昭和40年から50年代にかけてグラウンドの芝生化を行っています。乗用芝刈機、乗って運転する芝刈機でございしますが、これを購入し、芝を刈り込んでいましたが、雑草の除去には、相当苦勞していました。また、雨が降ると、土壌等の条件から、苔が非常に繁茂し、滑りやすくなったため、サッカーの練習などをはじめ、グラウンド利用に支障を来し、結局は芝を取り除くことになりました。

このように、雑草対策と農薬散布の関係や芝刈りなど、維持管理に多大の労力がかかり、芝生管理の専門職員を置かなければ維持管理は困難との意見があったようです。

小学校の事例では、永平寺町松岡の小学校で、100メートルコース以外が全面芝生化されていましたが、維持管理の負担はもとより、グラウンドの排水不良や根詰まりによる芝枯れがひどく、平成13年のグラウンド改修時に芝を除去した事例があります。

こうした問題を解決しなければ、現状では困難であると考えています。

次に、グラウンドの全天候化についてお答えします。

まず、南部中学校のグラウンドの排水改良のための基礎調査を、現在、専門業者に委託していますが、長山グラウンドの改修事例からも、多額の費用がかかることが予想されます。その上、グラウンドの一部を全天候化する場合には、100メートルコースを6コース設置した場合には、1校でも3,000万円相当のお金がかかると聞いております。

各学校でこうした施設を設けることは、現状では困難であると考えています。

なお、議員から、除雪も可能との御意見もいただいておりますが、維持管理全般につきましては、数値的なデータは、現在のところまだ把握しておりません。

このように、費用的にも多額の経費が見込まれますが、施設設備につきましては、緊急度、あるいは必要度合いに基づき、優先順位を定めて対応してまいりたいと考えています。

松村誠一総務部長

次に、情報伝達手段の拡充についてお答えいたします。

勝山市の観光情報の発信は、毎年、入場者が増加している恐竜博物館に加え、(仮称)おりものミュージアムのオープンや白山平泉寺旧境内の本格的整備などが予定される中、まち中と周辺大型観光施設の連携を図るためにも、大変重要なものであると認識いたしております。また、これらの素材をどのように効果的に観光情報として発信していくか。この課題は、今後も有効な方

法を多角的に検討していかなければならないと考えます。

さて、議員御提案のコミュニティFM局ですが、現在、確認が取れるもので、全国に221のFM局があり、北陸3県でも13のFM局が開設されています。福井県内では、福井市、鯖江市、敦賀市で開局されています。このコミュニティFMは、地域の人たちによる、地域の特色を活かした番組づくり、地域に密着した情報の提供などが大きな特徴であり、最近では、災害時などの緊急放送としても注目が集まっているようです。

開設運営については、第三セクター方式や民間主導、最近ではNPOによる設立など、様々ありますが、勝山市と同規模の自治体にある小さなFM局では、例外なくスポンサー集めに苦慮しております。また、第三セクター方式の局においても、収入のほとんどを自治体からの広報や防災関係予算から賄っている場合が多く、自治体の財政を圧迫しているケースがほとんどであり、実際に、事業から撤退した局もあるようです。

現実的には、すべての番組を自主制作することは難しく、地元のラジオ局や全国キーのラジオ局からの番組を購入したり、音楽の著作権料の支払いなど、経費は高額になるため、多くのボランティアの支えによって人件費が抑えられているのが現状のようであります。鯖江市では、平成17年10月にNPOが主体となって開局し、鯖江市、越前市が出資、情報提供などを行っており、また、約200人の市民ボランティアが局を支えているとお聞きいたしております。

開設することよりも、存続することのほうがはるかに難しいため、確固とした基盤となる市民団体の存在や、企画運営体制及び経費のめどが立たない限り、現時点では、当市といたしましても、経費的な支援などの検討には入れないと考えております。

もちろん、市民有志による開設に向けた活動が活発化していくような状況になれば、イントラ設備などの使用、貸し出しなども含め、市として積極的にかかわるべきであると考えております。

次に、現在、市が導入準備を進めている緊急メール配信システムですが、この機能については、防災情報などのメール配信のみではなく、市外から来られた方々へ、携帯電話を用い、観光情報等を発信及びほかの施設等への誘導・案内することができるような、拡張性を持たせたものにするので、現在、検討を深めております。

石蔵ふじ江健康長寿課長

がん検診制度の拡充についてお答えします。

昨年度まで、70歳以上の方は、がん検診個人負担金が無料であったものが、平成20年度から個人負担金をいただくこととなったため、従来どおり無料にできないかという御質問ですが、基本的には、相応の負担をいただくことにより、安心・安全な医療制度や健診体制が維持できるものと考えております。

御指摘のとおり、昨年度までは、老人保健法に基づき、70歳以上の方の基本健診は無料という法的根拠があったため、同様にがん検診も無料としてまいりましたが、本年度からは、老人保健法が高齢者の医療の確保に関する法律となり、高齢者の一般健診における個人負担金を無料とする法的根拠がなくなりました。また、4月からの新たな医療制度により、75歳以上の方は後期高齢者医療制度に移行したため、年齢による無料制度を、医療保険の種類による無料制度に変更したものであります。

あわせて、国保人間ドックの対象年齢は、70歳から75歳以上に引き上げることとしました。

勝山市と同様に、70歳以上の個人負担金を徴収しているのは、大野市、福井市、小浜市とな

っており、平成20年度の実施状況を見て、今後の検討課題としていきたいと考えます。

なお、住民税非課税世帯については、申請により無料としておりますので、御了解をいただきたいと存じます。

また、がん検診につきましては、福井県は、がん予防・治療日本一を目指しており、勝山市としても、受診率の向上を目指しております。

がんは、40歳代、50歳代で、罹患率が高くなることから、働き盛りのがん検診の受診者をいかにふやすかが大きな課題となっています。さらに、がん検診の受診者の固定化も問題となっており、初めて受診する方がふえればふえるほど、がんの早期発見につながると言われております。そこで、今後は40歳から5歳刻みの節目の方にがん検診を無料にするなど、働き盛りに焦点を当てた対策も、積極的に実施していきたいと存じますので、御理解と御協力をお願いいたします。

高木和昭市長公室長

お尋ねのありましたロボットコンテストについてお答えをいたします。

昨今の教育現場におきましては、子供たちの理数離れが大きな課題となっております。資源のない日本の産業が、持続的に発展していくためには、技術革新を生み出す原動力となる子供たちへの理数教育の振興を欠かすことはできません。

国際的なロボットコンテスト、WROワールド・ロボット・オリンピックは、子供たちがロボット工学や組込型ソフトウェアの基礎を、楽しみながら学び、指導に当たる教師の理数教育意識の向上といった、教育的効果が期待をされております。

福井エキシビジョン大会に先立ちまして、11月1日、2日に、パシフィコ横浜を会場に、WRO2008国際大会が開催されます。その翌日、11月3日に県立恐竜博物館で開催されるエキシビジョン大会では、横浜の本大会に参加する海外チームから選抜した8チームの招待チームと、福井県内の小・中・高校から選ばれる22チーム、あわせて30チームによる、本大会同様の競技が行われる予定であります。

テレビでおなじみの工業高等専門学校対抗のロボットコンテストは、一定の機械工学の技術やコンピュータのプログラミングの知識を必要といたしますが、デンマークのおもちゃメーカー、レゴ社と、アメリカのマサチューセッツ工科大学が共同開発いたしました教育用ロボット、レゴ・マインドストームを使ったWROは、市販のロボットセットとパソコンさえあれば、子供たちが気軽に参加できる点が特徴となっております。

このエキシビジョン大会に対する勝山市の取り組み目標は2つございます。その1つは、大会運営に参画して、かつやま恐竜の森の中での恐竜博物館で開催されるこの大会を通じ、勝山市を広く国の内外にPRすること。もう1つは、市内小・中学生が大会に出場できるように支援し、子供たちの理数教育の振興につなげるための道筋をつくるということです。大会の運営につきましては、福井県教育委員会内に組織されましたWRO2008福井エキシビジョン大会実行委員会に山岸市長が顧問として、また、私も監事として加わっているほか、市内から勝山IT研究会の会長も理事として参加いたしております。さらに、大会運営の実働組織であります競技運営部会には、勝山市の職員のほか、市内全小・中学校から理科教育担当教諭などが参加して、準備を現在、進めているところであります。

また、海外から招待チーム以外のエキシビジョン大会への参加22チームは、8月2日、8月3日に福井工業大学を会場に開催されますWRO福井県予選大会におきまして、上位入賞のチーム

の中から選抜されます。そこで、市教育委員会を通じまして各小・中学校へ予選大会への参加要請を行ったところ、市内から3つの小学校、3つの中学校、あわせて15チームの参加希望がありましたので、この15のチームを勝山市WRO公式参加チームと位置づけまして、昨日の6月15日に福井工業大学で開催されました講習会、チャレンジキャンプへ、小・中学生と学校関係者、市職員などを含めて、約50人が参加をしてみいました。

庁内におきましても、パソコンに堪能で、ロボットに関する技術や関心のある若手職員8名をメンバーといたします。庁内WRO支援チームを立ち上げまして、8月2日、3日のWRO福井県予選大会への参加に向けまして、小・中学校と協力しながら、参加する小・中学生への技術的支援を行うためのトレーニングを始めたところであります。7月上旬には、教育会館の中に公式競技用コースやパソコンを設置いたしまして、支援チームが、子供たちと練習をしたり講習会を開催してみいます。さらに、以前からロボットコンテストを実施している勝山IT研究会からも、様々な御支援をいただくようになっております。

公式参加チーム以外で、個人的にWRO福井県予選大会への参加を希望される子供たちについても、積極的に技術的な支援をしていきたいと考えております。

これら様々なエキシビジョン大会に関する取り組みにつきましては、今後、「広報かつやま」、あるいは公式ホームページを通じまして、積極的にPRをしてみたいと考えております。

また、この取り組みが一過性のものとならないよう、勝山市の理数教育の振興、あるいは、文科系クラブの活動の1つとして、継続的に取り組んでいくことで、子供たちの創造性を養い、問題解決能力の向上や論理的思考の育成を図っていきたいと考えております。

2番 帰山 寿憲

御回答、ありがとうございます。

奥越養護学校に関しまして、設置に関する思いは、市民の方々も含めて、保護者も含めまして、一緒でございますので、その早急な設置を希望するところです。よろしく願いいたします。

次に、コミュニティFMにつきましては、実は私も先般、FM敦賀さんに行ってお話を伺ってきました。開設に3,000万円、ランニングコストが年に2,500万円ということで、非常に維持管理に厳しいものがあることは存じております。

ただ、大阪府の元狭山市の制作室の方の論文の中には、人口減少する都市にこそコミュニティFMは有効だという調査もございますので、もし今後、市民の方々が立ち上げようという姿勢を見せた折には、ぜひとも、市から多大なる御支援をお願いしたいと思います。また、WROジャパンにつきまして、今、公室長から説明がございましたけれども、やっと勝山に咲いてきましたITという花ですので、今後とも、御支援のほどよろしく願いしたいと思います。

また、がん検診につきまして、今後とも、強力な自己負担金の軽減に向けましての努力をお願いしたいと思います。

さて、中学校等の部活動の問題につきまして、了解しましたと申し上げたいところなんですけれども、ただいま教育長からは、類似する3市において、できなかった市の御意見を伺ってきたと。できない者同士では、できませんねというところから、一步も前に進まないんですね。じゃあ、何で、できている市があるのか。その差は何であるのか。そこのところを、ひとつ伺いたいと。

もう1つ、競技場の一部、芝生を張るという希望は難しいものだと前からわかっているんですけども、福井県には、一応、あわら中学校というところがございまして、ここは一応、グラウンドを全

面芝生化にしています。ただ、そのランニングコストはすごいものがかかっているということで、そこまでは望みませんけれども。

一部トラックの全天候化、確かに、私も調べました。通常使われます、通常といいますか、現在、使われますトップクラスのスーパーXという全天候型舗装材。平米単価が1万 5,000円。仮に、それは12ミリ厚なのですけれども、3レーンで100メートルなら750万円。施工費を入れますと 1,500万円というのが、いわゆる建設物価というところに表示される一般の施工費でございます。

ただ、お伺いしたいのですけれども、敦賀高校の場合はどのような状況であったかということをお調べになったかなということをお伺いしたいと思います。おそらく、まだお聞きになってないんじゃないかなと思うんです、施工費10万円で、400メートル分、敷いておられます。なぜ、そういうことになったか、ちょっとお伺いしたい。

山 範男教育長

まず、最初の部分でございますけれども、勝山では、少子・高齢化が非常に進みまして、各学校では、部活動が満足に開けないといいますか、教職員の減少等により、そういう実態がありますが、しかしながら、それでよいとは思っておりません。そういうことでは、ここ何年か、総合型の地域スポーツクラブのあり方について研究をしまいいりまして、ことし初めて、試行ではありますけれども、始めることとなります。

こうした中では、学校区を必ずしも固定しておりませんので、こういうことが取り組めるのかどうかということ。もう1点は、教育委員会の職員も含めまして、高校の陸上部OBが、何とかこの状況をどうにかしたいという熱意のもとに、今のところは月2回でありますけれども、今後は週1回、そして、恒常的に陸上に取り組みたいという児童・生徒に向けて、そうした活動の場を設置できないかということを検討しているような状態でありまして、ちょうどスポーツ少年団が、必ずしも学校中心ではございませんが、十分な機能を果たしてスポーツの振興に役立っていますので、中学校の部活等も、こうした形がとれないかということでは、少しずつではありますけれども、考えているところでございます。

それから、敦賀高等学校のほうでございますけれども、まだ聞いておりませんが、敦賀高校の陸上部といいますと、勝山市におけるバドミントン部のような状況にありまして、県内各地、特に嶺南方面から陸上に取り組みたい生徒が集まって、学校の最も大きな特徴の1つとして取り組んでいるような状況があり、勝山市におけるバドミントン部のような状況にありますので、そこと、今、中学校とを必ずしも同等に考えることはできませんが、よりよい環境のもとで競技ができるようにということでは、長い将来には、やはり各中学校が、そうしたものにするほうがよいのか、あるいは、陸上等に取り組める場所が市内のどこかに設置されることが望ましいのかということも含めまして、考えていかなければならない問題であるなということをお認識しております。

2番 山 寿憲

かしこまりました。

実際、総合型スポーツクラブとなりますと、技術的には、大会レベルで戦える技術はなかなか身につけにくいものなのですけれども、そういう努力がされるということで了解いたしました。

ただ、敦賀高校の施工に関しまして、強いから施工したのではなくて、実は伺って来ました。あのトラックは廃材でした。いわば、産業廃棄物がグラウンドに敷いてある状態です。1つの工夫なの

ですけれども、競技場のトラックの張り替えによる、以前張られていたものをきれいにはがして、トラックで運んできて、それを生徒さんが張ったと。ただ、張るときに、整地するために10万円ほどの整地費用はあったけれども、1日で張りまし たと。そういう工夫がされての400メートルの全天候トラックです。行くと、継ぎはぎなんです、実際。でも、走る分には不自由がない。これで10年ぐらいはもつと思います。また、10年たったら、またどこかの競技場の廃材をもらってきてまた張ります。

ただ、聞きましたら、とても重いんですよ。20メートルぐらいで、1レーン、300キロ。全部で30トンかかりました。ただ、捨てるものなので、施工する業者が全部運んできてくれたということで、そういう工夫の上で成り立ったと。我々も、見習って、一つ一つ、そういう工夫をして、少しでもよい環境を整えていただきたいと思います。

これに限らず、例えば、盛んであるバドミントンにしましても、先日、伺いましたら、支柱に張るネットが、手で最終的には引っ張って張るんですけども、止める部分ですね。それが鉄でできていますので、ガチャンと落ちて、そこで小学生の方が結構けがをする。結構、血豆をつくっている子供さんがおられる。そういう器具の改良とか改善とかを要望いたしまして、質問を終わらせていただきます。